

## 「ヲ出る」「カラ出る」の文法 (その2) ——「物理的意味」と「抽象的意味」の間——

丹 保 健 一

### A Grammar of Japanese “wo deru” “kara deru” (2)

Kenichi TANBO

#### 要 旨

本稿では、これまで指摘されてきたうちのいくつかを再検討するとともに、抽象的意味と物理的意味との関わりについても指摘する。そして、これらの作業をとおして、「ヲ出る」「カラ出る」の意味作用の一端が明らかになった。

#### キーワード

「から出る」「を出る」「起点」「経由点」「組織名詞」

#### 1. はじめに

「N2 が N1 {ヲ/カラ} デル」の意味用法について、これまでなされてきた物理的移動に関する成果と、抽象的（機能的）移動と物理的移動との使い分けについての成果を次のようにまとめておこう。(A) (B) は物理的移動に関するものであり、(C) は抽象的（機能的）移動と物理的移動との使い分けに関するものである。

##### (A) 「N2 が N1 {ヲ/カラ} デル」における共起について

###### ① N2 が有意志体の場合

「を」、「から」共に可

但し、無意志動作においては「を」不可

着点をも含意する場合は「を」不可

###### ② N2 が無意志体の場合

「を」は不可、「から」は可

但し、コントロール下にある場合は、「を」可

###### ③ 場面の展開

「からデル」；その後の場面展開は、直後（その場あるいはその周辺で）の行為に限定される傾向が見られる。

「をデル」；その後の場面展開に「からデル」のような限定はない。

##### (B) 「N2 が N1 {ヲ/カラ} デル」(物理的移動)の意味

###### ① 「N2 が N1 ヲデル」

A. N2 が存在していた場所 N1 から目的意識を持って（またはコントロール下であって）離れる

B. N2 が内から外への移動行為がなされる場所 N1 を目的意識を持って（またはコントロール下であって）通過する

② 「N2 ガ N1 カラデル」

A. N2 が存在していた場所 N1 から越境（内から外へと）移動する

B. N2 が存在していた場所から経由点 N1 を経て越境（内から外へと）移動する

(C) 抽象的意味と物理的意味の使い分け

- a. 「抽象的な移動を表す場合は、カラは取りにくい。」（益岡・田窪（1987））
- b. 「したがって「出どころ」も、物理的な囲われた空間をさすのではなく、身分の属する制度とか機関とかをさすのであれば、(6) の④（引用者注；その場所と移動の関係を言い分ける形式）には「カラ」は使えず、「ヲ」を使わなければならない、というきまりで説明することができる。」（寺村（1989））
- c. 「起点表現に「から」と「を」が交換可能な動詞では、「から」は純然たる物理的移動を表わす場合に、「を」はその起点名詞の本来的機能に言及する場合に使用される。」（影山（1980））

なお、(A) の③は、丹保（1997）において指摘したものであり、(C) はこれまでの指摘を並べたものである。

## 2. 問題の所在

- (1) 「N2 ガ N1 ヲデル」において、N2 は有意志体又はコントロール下にあるものとされているが、例外はないのか。次のような例も擬人化された例外とするのであろうか。

例文；そう思っている、いままで立昇っていた煙突の煙が、煙突【を出たと】ころで、渦を巻き出したのである。注1

- (2) 着点をも含意する場合は「を」との共起が不可能であるとしているが、例外はないのであろうか。次のような例はどのように説明するのであろうか。

例文；飛驒国では高山に二日、美濃国では金山に一日いて、木曾路【を太田に出た。】

- (3) 「抽象的な移動を表す場合は、カラは取りにくい。」とされているが、次のような例はどのように考えればよいのだろうか。注2

例文；小さな大吉の【村からもいくにんかの少年航空兵が出た。】

## 3. 「ヲ出る」「カラ出る」の諸相

- 3-1 「N2 ガ N1 {ヲ/カラ} デル」において、N2 の意味特徴として、有意志体又はコントロール下にあるものに限定してよいか？ 次のような例文はどのように説明すればよいのだろうか。

例文；そう思っている、いままで立昇っていた煙突の煙が、煙突【を出たと】ころで、渦を巻き出したのである。

作例①チリ沖を出た津波は…

②心臓を出た血液は…

- ③陽極を出た電流は…
- ④東京を出た荷物は…
- ⑤銀河系を出た光は…
- ⑥？水中を出た泡が… 注3

三宅（1995）には次のような記述がある。

「◎意志的にコントロールされない移動の場合は、ヲ格を使うことはできない。

尚、次例のような擬人化されたものは、当然ながらこの一般化の例外になる。

(9) 名も知らぬ遠き島より流れよるやしの実ひとつ。ふるさとの岸を離れて、なれはそも波にいくつき。」

しかし、「ふるさとの岸を離れて、」を擬人的であるとするに疑問を抱くものも多かろう。先に挙げた例において、その移動主体（N2）はいずれも有意志体ではない。また、「荷物」以外はコントロール下にあるとはいえないであろう。

そこで本稿では、N2の条件を、作例⑥の不自然さをも加味して、つぎのように考えたい。

◎「N2ガN1ヲ出ル」において、N2が無情物であっても、その状況下において、N2が方向性を持ち、その後（出た後）も移動が継続されると予想される場合は、「を」との共起が可能である。

### 3-2 着点をも含意する場合は「を」が不可なのか？

三宅（1995）において、次のような記述がある。

ヲ格が使えない例には、次例のようなものもある。

(10) 太郎が部屋 {\*を/から} 庭に出た。

太郎が関西空港 {\*を/から} ロンドンに出発した。

上例は前述の一般化では説明できない。意志的にコントロールされた移動だからである。

上例から着点を表す名詞句である「庭に」「ロンドンに」を削除すると、ヲも可能になることが分かる。

(11) 太郎が部屋 {を/から} 出た

太郎が関西新空港 {を/から} 出発した

したがって着点も同時に言語化された場合、ヲは不可能になるという仮設が立てられそうだが、このことを裏付けるために次のような例を考えてみよう。

(12) 太郎が学校 {\*を/から} 帰った

太郎が東京 {\*を/から} 来た

太郎が東京 {\*を/から} 戻った

上例においても、ヲは不可能であるが、これは「帰る」「来る」のような動詞が、実際に言語化されなくとも、常に着点を含意するタイプの動詞であるということが言えるからであろう。また次例も参照されたい。

(13) 太郎が東京 {\*を/から} 大阪に向かった

生徒たちが運動場 {\*を/から} 教室に入った

(13) のように、起点を取ることもできるが、必ず着点及要求される動詞の場合も、ヲは

不可能である。このような動詞は他にも、「移動する」「行く」「集まる」「向かう」などがある。

以上のことから次のような一般化が得られる。

◎着点をも同時に含意する場合は、ヲ格を使うことはできない。

上記のような三宅の指摘は、一般的には正しいといえる。しかし、次のような例に対しては何らかの説明が必要となろう。

----- 新潮文庫の100冊（≡山椒大他.txt -----

飛騨国では高山に二日、美濃国では金山に一日いて、木曾路【を太田に出た。】

尾張国では、犬山に一日、名古屋に四日いて、東海道【を宮に出て、】佐屋を経て伊勢国に入り、桑名、四日市、津を廻り、松坂に三日いた。

----- 新潮文庫の100冊（≡山椒大他.txt -----

それから蔵前【を両国へ出た。】

----- 新潮文庫の100冊（≡放浪記.txt -----

紫蘭邸【を一步外へ出ると】、何とない自分の将来に対して幻滅を感じるのだけれど

作例⑦ 大きな門を西に出た。

もちろん、「N1を～へ／に出る」が、何の制限もなしに用いられているとは思わない。このような形式そのものを持つ例がむしろまれなのだから。その意味ではこれまでの指摘は一般的には正しいのである。

ちなみに、「N1を～へ／に出る」の形を持つものとしては先に挙げた以外には次のようなものもある。

----- 新潮文庫明治の文豪（≡それから.txt -----

士官学校の前【を真直に濠端へ出て、】二三町来ると砂土原町へ曲がるべき所を、代助はわざと電車路に付いて歩いた。

----- 新潮文庫明治の文豪（≡鶏.txt -----

石田は鍛冶町【を西へ真直に鳥町まで出た。】

「N1を～へ／に出る」の条件を、「N1から～へ／に出る」における置換テストによって、探ってみよう。（用例数が多い為ため、用例出典を示唆するファイル名は省略する。いずれも『新潮文庫の100冊（CD-ROM版）』からのものである。（なお、「出ていく」等の複合動詞や、「窓から外へ出る」などの、「N1を出る」それ自身が不自然なものも、挙げていない。）

○心【臓から動脈へ出る血】が、少しずつ、後戻りをする難症だから

○私達は其所【から左へ切れてすぐ街道へ出た。】

○受付の部【屋から、一同は廊下へ出た。】

「ヲ出る」「カラ出る」の文法（その2）

- 彼はまるで悪臭ふんぶんたる室【内から、すがすがしい大気の中へ出たよ】うに、
- ぼくは裏【口から外へ出た一】
- かれらは毎朝列をなして、僧【院から町に出てき】ます。
- 路【地から広い通りに出て、トンネルを抜け、また広い通りに出た時】、
- 吟子は裏木【戸から隠れるように外へ出た。】
- 八時半に寺を出て、山【道から鞍馬口に出る。】
- オツベルの家の百姓どもが、【門から少し外へ出て、】小手をかざして向うを見た。
- だが、むっとするような屋根裏部【屋から往来へ出てほ】っとすると、
- 宿の【裏から河原に出る道】があった。
- 暗い小【屋から外へ出ると】、燕岳一帯の白さで眼がくらむようだった。
- 加藤は【穴から外へ出た。】
- 近【江から美濃関ヶ原に出、大】垣の城下を通り、そこから墨股、竹鼻を経て、木曾川を渡った。
- 僕も食堂を出ると、もう一度鰻の子の遡上を見るために非常【口から裏庭に出た。】
- そして馬車が【門から庭へ出ると】同時に、彼はさっと右のほうへすべりこんだ。
- ドア、控【室から階段へ出る外】のドア、彼がさっき呼鈴を鳴らして入ったあのドアが、鍵がはずれたままになっていて、そのうえ、掌が入るほどあいていたのである。
- V通【りから広場へ出たと】ころで、彼は思いがけなく左手のほうに、完全なめくら壁にかこまれた外庭へ通じる入り口を見た。
- 二人は【庭から裏の山へ出た。】
- 【畑から子の神道に出て、】暫く行って又畑の間を小学校の方へ曲った。
- 気分でひと回りすると、さっき入ってきた入【口から会場の外に出るこ】とにした。
- 会【社から外に出ると】、
- 食【堂から庭に出ると】き、彼女はジュリヤンの手を握った。
- ジュリヤンが菩提樹の刈りこんだ枝でできている円天【井から外へ出れば】、伯爵とその
- ところが間もなく来た十七八の芸者を一目見るなり、島村の【山から里へ出た時】の女ほしさは味気なく消えてしまった。
- 金【沢から彦根へ出て、】それから、京都に行き、今日は京都から、又各駅停車の電車で帰って来たのである。
- 深川に生まれ、十二のとしまでそこで育った、いわば深川っ子を深川へ、去年の春、東北の片【隅から東京へ出てき】たばかりの私が、
- 私は部屋を飛び出し、暗い階段をすべり落ちて、玄【関から外へ走り出た。】
- ある冬の午後、やはり売血を終えて上【野から高田馬場へ出た。】
- とにかく寝【床から外へ出てし】まわなければならない。
- そのうえしかも【家から一步も外へ出ない】単調なこの二カ月間の生活は、
- そこで彼が寝椅子の【下から外へ出て一】
- 「私は名刺をもらおうと楽屋【口から外へ出た。】
- 茅【町から上野へ出て、】須田町行きの電車に乗る。
- 二人は坂を降りて漸く窮屈な場【所から広場へ出た気】になった。
- 途中の小さな出入【口から下駄をつっかけて外へ出、別】棟の浴場へ行くのである。
- お茶の【水から本郷へ出るま】での間に人が三人まで雪で迂った。

○最初の電燈は旅【館から街道へ出たと】ころにあった。

以上の例文によって、置換の可不可等を見ると、次のような条件を挙げることができそうである。しかし、「AをBへ／に出る」はいまではやや古風な言い方になっているといえよう。

◎「AをBへ／に出る」は、BがAに接している場所、又はBがAからの方向を表す場合に可能である。

### 3-3 抽象的な移動と物理的な移動

抽象的な移動を表す場合にカラを取りにくいことをめぐって、これまでに次のような指摘がある。

- (1)「抽象的な移動を表す場合は、カラは取りにくい。」(益岡・田窪(1987))
- (2)「したがって「出どころ」も、物理的な囲われた空間をさすのではなく、身分の属する制度とか機関とかをさすのであれば、(6)の④(引用者注；その場所と移動の関係を言い分ける形式)には「カラ」は使えず、「ヲ」を使わなければならない、というきまりで説明することができる。」(寺村(1989))
- (3) 起点表現に「から」と「を」が交換可能な動詞では、「から」は純然たる物理的移動を表わす場合に、「を」はその起点名詞の本来的機能に言及する場合に使用される。(影山(1980))

これらの説明は、取り上げられている例文を見ている限りにおいては、全く問題がない。しかし、一般化しようとする、と、わかりにくい点が出てくる。

抽象的な移動とは何を指すのか。たとえば、「学校からでた噂が…」といったものも含まれるのかといったことがまず問題になってくる。しかし、煩雑さをさけるため、本稿では、意味の解釈が問題となりやすい、「ヲ」(抽象的移動)「カラ」(物理的移動)のいずれとも共起が可能であるものに限定して考察をすすめることにしたい。

いずれの意味にもなりうるものとしては、N1が、次のような、機関、組織を表す名詞である場合がまず目に付く。(括弧内の名詞は、N2がN1 {ヲ/カラ} 出ル、におけるN1の具体例を示している)

学校 {ヲ/カラ} 出ル/タ (学生・卒業生、教師)  
病院 {ヲ/カラ} 出ル/タ (患者、医師)  
刑務所 {ヲ/カラ} 出ル/タ (受刑者、職員)  
家 {ヲ/カラ} 出ル/タ (構成員)  
村 {ヲ/カラ} 出ル/タ (村民)  
国 {ヲ/カラ} 出ル/タ (国民)  
町 {ヲ/カラ} 出ル/タ (町民)  
組 {ヲ/カラ} 出ル/タ (組員)  
～党 {ヲ/カラ} 出ル/タ (党員)

球団 {ヲ/カラ} 出ル/タ (選手、職員)

会社 {ヲ/カラ} 出ル/タ (会社員)

これらの中で、「会社ヲ出ル/タ (会社員)」「刑務所ヲ出ル/タ (受刑者、職員)」「病院ヲ出ル/タ (患者、医師)」「銀行ヲ出ル/タ (行員、客)」などは、その意味はかなり異なる。「銀行」の例から言えば、所属していない「客」では、機能に言及することにはならないであろうし、所属、つまり、構成員である場合は、「構成員であることをやめる」意味となる。「から」の場合は、単に物理的な移動を示すのが一般的であろう。

「学校」「病院」「刑務所」はいずれも、或る人々を一定の期間、所属させ、目的を達成させる機関・組織である。しかし、「ヲ出る」の意味合いは相当異なる。

「学校 (大学等) ヲ出ル/タ」の場合は、教師の場合は「構成員であることをやめる」ことであるが、学生の場合は、「卒業する」の意味となる。これは、学んでいるものにとって、所属から離れることは普通、卒業することだからである。これに「ヲ」の目的意識とが関わっているものと思われる。しかし、「学校を出ていけ!」のような文では、「学校をやめてしまえ!」の意味として使われることもあろう。この場合、「出る」は意志的な目的的な行為といえない。ここに、本来的な機能から生ずる意味としての「卒業する」ではなく単に所属を離れる意味としての「やめる」の意味が出てくる理由がある。

「病院ヲ出ル/タ」は、職員にとっては所属を離れること (病院をやめる) ことであるが、患者の場合は退院することである。しかし、「学校を出る」に比べ、退院するの意味は希薄である。これは、おそらく、目的意識とも関係しているように思われる。さらに言えば、意識的に「病院に入り、出る」ということとも関係があろう。

「刑務所ヲ出ル/タ」についても、受刑者の場合、所属性・構成員性の弱さ、目的性、等から言えば、「自らの意志で一定の期間そこに入り、罪をつぐなって出る」といったことはないからである。そのため、抽象的な意味は曖昧にならざるを得ないのである。

「家ヲ出ル/タ」の場合は、「家」の持つ機能が曖昧であるが故に、所属を離れる・構成員であることをやめるといった意味が根底にあり、状況により、「家出」、「独立する」、「出家する」等の意味となるのであろう。「家」の場合は、「子供」にとっては、成長させる為の機能を持つとする事もできると同時に構成員とすることもできる。その意味では「学校」等と「会社」等との中間的な位置を占めているといえよう。

「会社/銀行」を出る」が表す抽象的意味は、N2が構成員の場合は、所属を離れる (会社をやめる) ことであり、N2が客の場合は、抽象的な意味は考えられない。

「家を出る」の抽象的例と物理的意味、及び「村を出る」の物理的意味、「村から出る」の抽象的意味、それぞれを表す実例を挙げておこう。

---- 新潮文庫の100冊 (¥塩狩峠.txt) ----

とにかく、永野家にヤソの嫁はおけません。

菊! この【家を出ても】らいましょう!

「それは、ひどい!」

---- 新潮文庫の100冊 (¥あすなろ.txt) ----

小母ちゃんに渡したということが、ちょっと気にならないこともなかったが、鮎太はそ

のことは冴子には内緒にしておいた。

翌朝、鮎太は勉強を早く打ち切って【家を出ると】、留吉と幸夫の二人を伊豆屋へ偵察に派遣した。

加島とあの少女が今日この村を引き上げて東京へ帰るのではないかと思ったからである。

----- 新潮文庫の100冊 (¥若きウエ. txt) -----

上手の小道を通過して【村を出ると】不意に谷全体が見渡せる。

料亭のおかみさんは若くはないんだが愛嬌があってきびきびしていてね、酒もある、ビールもある、コーヒーもある。

----- 新潮文庫の100冊 (¥国盗物語. txt) -----

庄九郎というような者が出るのはふしぎでないだろう。

ところが、その【村から同型の若者が出て、】三好家を動かしている。

「ふしぎなものでござりまするな」

----- 新潮文庫の100冊 (¥二十四の. txt) -----

小さな大吉の【村からもいくにんかの少年航空兵が出た。】

このように見てくると、「N1ヲ出る」「N1カラ出る」の意味解釈が、「N1」の語義によって異なり、また、N1が同一の語であっても、文脈によって異なることに気づくであろう。

また、いわゆる抽象的意味は、これまでも指摘されているように「N1カラ出る」ではなく「N1ヲ出る」に出やすいことも頷けよう。用例としては挙げなかったが、『新潮文庫の100冊 (CD-ROM版)』によって「学校を出る」の用例を集めたところでは、その殆どが、「卒業する」の意味で用いられていた。

「組織名詞+から+出る」ではなく「組織名詞+を+出る」に抽象的意味が出やすいことは、どのように考えればよいのであろうか。それは、おそらく、先に触れたこととも関連するのであるが、直接表出性によるところが大きいと思われる。森田の言う目的意識である。別な言い方をすれば、「を出る」の「出る」が意志動詞である場合、動作主体の目的性とも言うべき働きかけ・心情が入りやすいからであろう。それは、「この村からでよう！」「この村から出ていけ！」「この家から出ていけ！」に、単に物理的移動以上の意味を感じやすいことから推察できよう。

ただ、一連の行為が継続されている場面、たとえば「翌朝、鮎太は勉強を早く打ち切って【家を出ると】、留吉と幸夫の二人を伊豆屋へ偵察に派遣した。」などにおいては、「を出ル」が、物理的移動となるように、「を出ル」が抽象的移動を表しにくい文脈もあることも事実である。

ここでは、「ヲ出る」「カラ出る」が見せる振る舞いの相違を生じさせている要因として次のような点を指摘しておきたい。N1の語義性の別等については略する。

◎「ヲ(出ル)」の直接表出性の度合いは、「カラ(出る)」に比べ高い。

#### 4. 「ヲ出る」「カラ出る」の諸相

本稿で新たに示したことをまとめておく。



## 「ヲ出る」「カラ出る」の文法（その2）

- (1) 「N2ガN1ヲ出ル」において、N2が無情物であっても、その状況下において、N2が方向性を持ち、その後（出た後）も移動が継続されると予想される場合には、「を」との共起が可能である。
- (2) BがAに接している場所、又はBがAからの方向を表す場合に「AをBへ／に出る」が可能である。
- (3) 「ヲ（出ル）」の直接表出性の度合いは、「カラ（出る）」に比べ高い。

## おわりに

本稿で指摘したこと相互の関連性についての考察までにはいたらなかった。また、起点「を」と起点「から」の別、経由点「を」と経由点「から」の違い等、言い残したことも多い。機会を改めて述べたい。

### <注>

- ① 作例としているものは、すべて、用例出典一覧の(1)又は(2)による
- ② 「愛の精神から出たものと…」 「本心から出たものではない」などのように具体的な移動と関わりを持ちえないもの、つまりN2が具体物でありえないものについてはここでは扱わない。
- ③ これらの作例の一部は1997年度に金沢大学で行った集中講義において受講生から出されたものである。

### <引用・参考文献>

- 益岡・田窪（1987）『日本語文法セルフマスターシリーズ3 格助詞』  
寺村 秀夫（1989）「意味研究メモ その1」（『阪大日本語研究』1）  
影山 太郎（1980）『日英比較 語彙の構造』  
森田 良行（1993）『基礎日本語』  
三宅 知宏（1995）「ヲとカラ」（『日本語類義表現の文法（上）』）  
丹保 健一（1997）『「ヲ出る」「カラ出る」の文法』（『金沢大学語学・文学研究』第二十六号）

### <用例出典一覧>

- (1) 『新潮文庫の100冊（CD-ROM版）』新潮社 1996
  - (2) 『新潮文庫明治の文豪（CD-ROM版）』新潮社 1997
- 謝辞：誰でも簡単に取り扱うことができるこのようなテキストの提供は、日本語とりわけ現代語研究に大きな貢献を果たすに違いない。新潮社に対し、感謝の意を表したい。